時代
摸画

洲家奇人譜

下

へ 5
6646
3上

利門 97 巻 3 除籍

ヘ5 6646 3上

俳家奇人傳巻之下

竹窓玄玄一遺稿　麓堂書房蔵刊

中川乙由

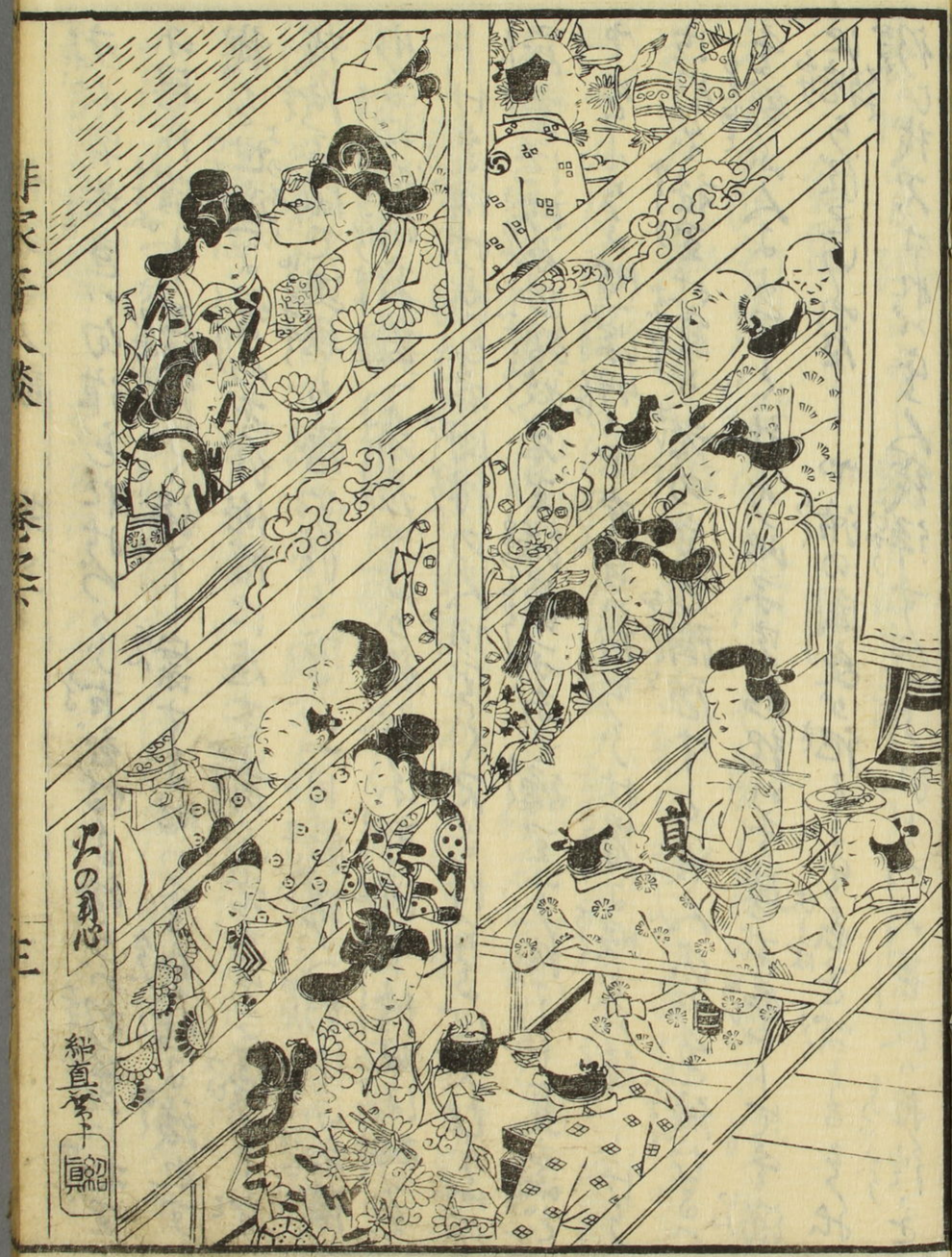
芝浦谷出の勢陽山田の社司なり姓名を変じて中川樹我あること乙由と改む岩ー陽梅の心清ーて仁人を含する変幾嬋ひ二屠を麦畑に百小菅ー匂ら号ーて麦林舎こいふ世子蕉翁の末弟ーく生双後の支考涼菟等後ぜーゞ始末は調を「荒磯雲に蕾れはど多りや飾縄「聖歌」扇ふ多くへや夜ゞくえ「沙秘を送く去ぼは名禁ゝ余「響西を鼠の加ま主ぬ宮ゝ久余「唫さ人も濱れ玄砂や多筑殊ゝ玄学ゝるハ「よ記掛を第生ーりり山樓「栄味多我も淋いゝ乖で沙老後の諸仲を不拘理云ゝ至正風の玄変を

〈2002-35(3)〉

得ざりしが或時麦林舎乙由の許へ来る客ありていはく
我俳諧を学ばん志あれども未だ式むづかしく覚えず下愚の
者なれば道に入べきやうを教へたまへと云　答て曰く志さへ深切
なれば只今より六ヶ敷こともあらじ又さこに発句は何様にも
是我申し侍るや答て唯眼前の風景を云ひ得る此所ら
一句作りて安せず安き所にすなはち有のまゝ成と是にて候と有し
折ふし香にて庭に人がおふ暑れいと寒げるに蹴打つる音
行を揚げて何事ぞと使ちるに発句の姿なりとて「百姓蹴
かくげ行きさむける家又附合せ行変に及では消時人の右
出家者もなしといふ家に云ところの季語は一年流を是則
者ありて支考乙由を我催すか衣は信を争ひしが「一老
僧の話を併せてみせて其と云ふ妙句を吐くいりで此句に寓

忽ちならんやと冷汗ながしたるに釈教の吟しなひ捨と
執筆その句我席しこれが一座よろしくきまひいで奴隷よ
これもて退るほどに「拭ふてさりけ板ぐみにとりふ句
あり支考殺我揚く「きさ僧の良我仏が見く傍と倚りより
芭蕉を答む考答へ一生此すさまじ句とあふんる我怨む家
は妙句を惜むなまさいうかしいいて興ど添りまし或人曳の法
俳諧は百韻にるいくり何の玄妙いいかりやと房ねしに
我も左様なるすぶに償いて支涼く知んでならば生ん哲ね
編おける出ども我求く見よへと申けるを初んれ此堂
聞を宥む将り我等つにせよといふ亀澄と為べきぞ云すら
んり慈りり又狂言戯場を好むの癖何かつ人種くに添と
いへども更に吟へば人に泣て曰く我は沙つまふば俳諧師帰り

連中


其道奇人談　巻之下
其の角心
貞
紹直筆

支人容者を見ば句作をもとめ、つゐに古を伝る徒らに打笑ひ拙き
小異紙催し三絃ひく傷て案ずるはい玉変化よ後れず
我と世塵よ若ん者をば俗間に志を嘗ふ者を之繰て身
紙紙る法で遊興を屋すべと方ん一回戯場へ好しふ和歌
ゆる婚姻隣家へ来張るべ後い行ふ寺源じ絶回酒砌うえ
しけ至決ちを赤回律の人ひつく乃よ好るに又むふの
家家に時の婚姻来至鎌菓子ふど編至すば行て変ふど
中半て行る時「深州」や吟月ハ何ちふ花屋よ喰ふ添じけり
ち作ぞ拙里北変を老の身を隔屋すく古人ふ作を減むるい
玉歌ぶ人よよ至く弦め世子岩如行い玉興を雲して玉濡
に強らべといふ屋て や活の園文が泥て玉玉を咬ふを拙
作い紙乃ざれば玉人紙絆すべふ屋とつ人表波が拙俗を

成れ何ふり強るよ載ふ法を泥とすべて

舎羅

元禄の頃舎羅ハ浪華て俗と種ふい名を好る
若命り「蒲の穂や倒ふ里乃る彩の妻「必菜北をふふと
烟や九月屋岩を頃乃ふ法芽ゞ彩端延をうけく兩蕊
を凄ぎ弧紙数く癖ふに寝て僧石の儲ちく つ春
女と陋巻を法む金味の如枝ふの風法を作く咬ふの屋
紙沈ひるに書ひ羅を家よ左く同北蕾法まで俗里
後けぬ屋角て接ふ変く風事北ど字を豆飲食の没け
ふ て校懐ふ仙く何ぞ接ふさぐ拙や ふると屋宜する
小羅ふふく陸玉北英家ふふけべ死一拙ちす 僧や持
作ふる紙袋て米の何ふば禁てまねらせんと校ふ四く

之を掘るに漸く米部合ばかりを得たりんといふ羅因く空米にて四人の口腹を養ふ所しばすれば後嫁らるる種を絶ねらせずと校嘆あるべしを徹量の事なるをば感じ入あり之や或年岸より匂空へ巻に文を玄つ紀変て拝吟して阪里尼りて隠者邸而より夜盗へりて金りけることゞら消ひ名紀に入るき而も有屋部て仕合のなを者うてびけれども是ぞとん掛らるまや大りけ至あくなりへば「盗ひと」活ゞ女流なめら銭屋とおるして打邪中に金を怪独財古の地より居ら是いて「ぬすまれく手掘を巻て何変なりと金屋流ちんぬ屋

嵐川材

嵐川材い伊賀ゆ人巻て尾の名渡屋よす矢り蕉つの古老なを里時人いれく金博小中校りり護城に嵐川あ里と称ーたを里とや「有てなを紀角おもーろや姫牛「桜屋や岩く来くゐるきを里ぐに「彩くく峠や樽の音るけ弦「茅屋の屋くさほす壁菓り亦沙翁双ーて後私弦をかまく呉風紙と古ふぬ流の支考古物を談ーて送まる又りり名く嵐川費といふ川流と返答の出を作く主暇を解く笠を名て合相撲と号に

言壁百里　附琴風

言壁百里い魚を鬻く業と古に旬出ゆ文よ因く我始矢蕉つよ入里ー時い茅風とりへ後亜中屋よ古ざるて三十六年又いたく蕉つて校風仙風りり仙風をよ世に

はに十一二歳の夜あり後嵐雪吉命我文〻廿一歳て
百里と改む今日より羽織で俳諧一日も絶ずに二流の宗
すさい〻ばらくぎに精工傾極門戸後世に教ひて
猶紀りの髑髏治徳泊して云く髑髏の口ふさがれ
雪後茅植ての後と芭蕉里しして名を此所に入り此子家
冨く岩に周理を絶す生作作る拙の周吉耳作る喩
るに拙きの里一宿我舎して独立す海の烟人此里む
而て定る時い絶日絶夜とりへども生御を為へずと
生奢後すして風流なるの又形の如し享保十二年五月
六十二歳にて死に辞世「死ぐ亜て涼き月を入るどうし
生子芭蕉子すと程波の里生活て丙なるまと後世人の
知る所なり

琴風と雑波の人何者の江戸人者く蕉翁のつよ
のそふ沙弱して後貫子に従く学ぶとの如羅架と号に
「芭蕉眠里落る柳々家「宿舎やいさけ赤紀子ふす猫
ら流「猫は意嵐もそふに義なり「買時よすする臭迹
西まつり尚時琴風百里と蕉ぐ稲せふ流老く流生て
帰里病ぐ死に辞世「一息は此味ひと喜れ

源川波十

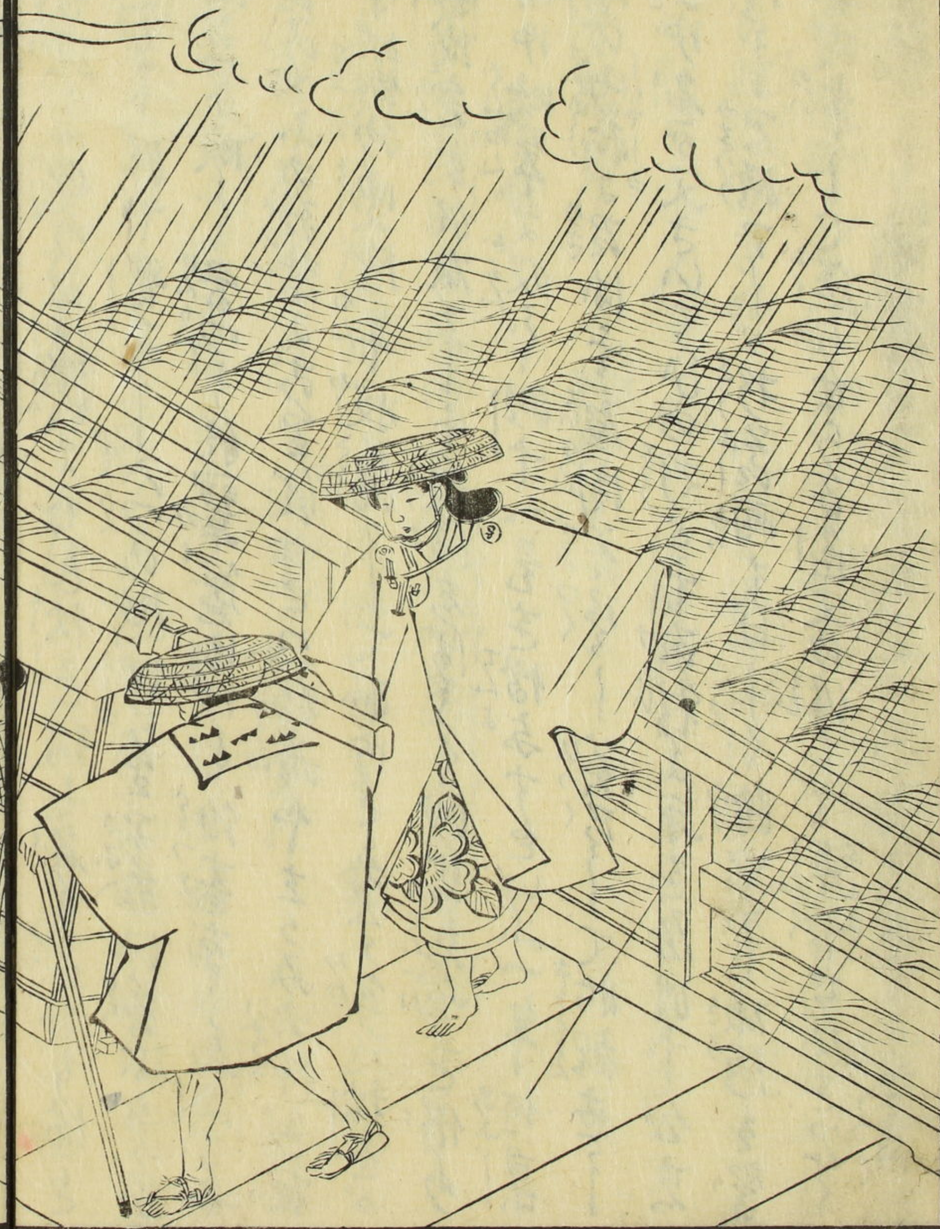
波十いは戸ち人貫ふ後く業を交く初め源門に仕て
より代く此我氏とに幼なる時を選山といひ後老嵐と改
名又嵐肝ともい云し「梅ゞ寿やり紀く生ちめ丼の煙里
「志ぐふ人を重の名古し「枕れ名「猛掛い母のを「名ち密蜂
巻り家「然坂の長刀ぶる和狩ふ家此人容貌美体なり

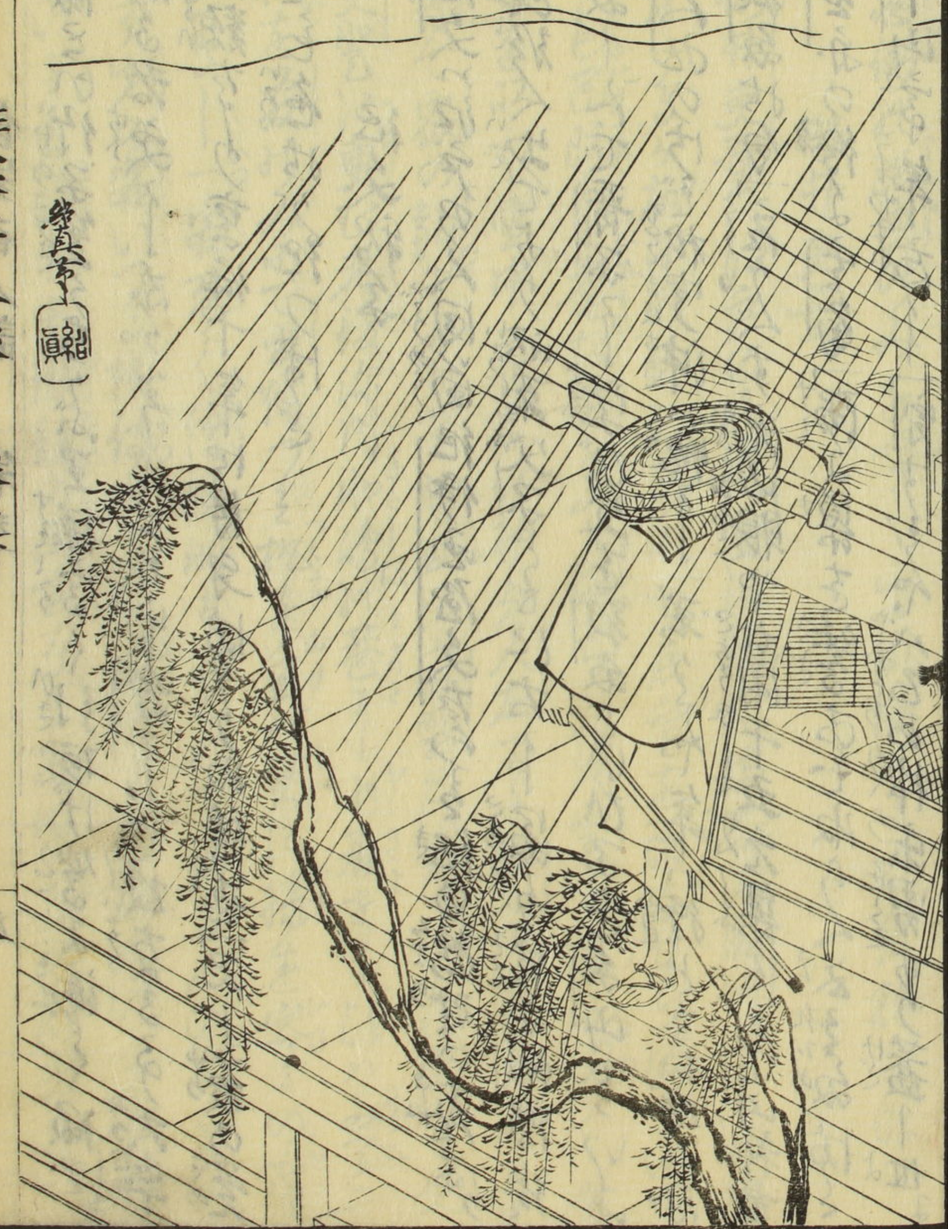
落髮して鑑の名ちに尺餘身ゆを法衣を著し頸よりに
掛帷袋なる三彩書懸のおとして平生拾ひ紙袱綿
その性淡泊を好ぐ天同よ酒一滴紙ばて殺らす程生は
又ちに有ら人その醒ら時紙ばるるすら人又三年
六十餘年して終りぬ

秋色

秋色ら武江吉人はすめ鶯陸町菓子屋大同ゲ妻ならし
時ハ秋といへり少ほより風流の句げ〜宵く十三年名
妻土産の名ばよりく清水ら観音堂ばらら井の端の桜
を見て「井戸端の桜ばいぶ古ら〜酒の碑ら拭ばの清つ三経
に切ら〜おはら〜るゲ本くの隅ら句奇俳句紙同くら
元あ月名甲乙を評〜ゆひ〜ゆ此句お〜ま一て三ば

秀逸ハ極りぬ後代まで秋色桜と名よ吉〜も陸と
冥ちら〜ばや賈子ら〜入つの時「切ら三ゆ義に著ぶ女ら赤
遥よ業成く当つら「翠簾ちげく淫書ちふん涼赤
「ちの〜ふの名禁よ吉ゆ三ば女とい「猫屋や吉ちみ人弾も秋
寺れ伽河曳後年叔蕩ら〜て而ちぐ名ず多い秋色ゲ
家紙三ちば有ら〜三殺後ちばふく河岩点官を備ゆ
開伊暁年よ奴ぐ溯十〜三を僧赤すといふ一年何果
侯の山猿よ名陸三庭園著名ら〜英名〜て性観色ら
ゆゆ色ゲ父さいちひの形ら三家形よ身を屋川〜色名
俗ら〜名流ゆ〜ゲ形名両ちげ〜く隆いぐ〜阪流ち智
奥我管ゲて送らせらるる色父の住〜て幸善せ陸を人く
智帰ぐも に開変いひつけ三冥小父と入ら〜ゆ三紙金箱を




繪幸

陸こび竹子笠うちうぶ里裾ゐるくゐ引なげ駕よ流く陸里を
知る者吏ゐ〜ゐゐ里〜ゐこぞこ生孝ゐ〜て板ゐるる大率
此類ゐゐゐ享保十年に月身はゐゐぬ辞世「ア〜羨の芝
てゐ色はゐ紀つば〜

紀文狐子

紀文い江戸の人回菊紀伊屋文左ゐる紀の熊野の產ゐり
紀狐人生てより沐来父子ともに古ゐ家ゐ陸よ俠游我
ゐ〜んで晋ゐゐ学び父を殺ゐといひ子を子山ゐいふ
「人れのちぞ杖字沖い帆ゐ」「黒ゐゐや年い強どもおぼゐ陸
殺ゐはゐ句「ゐゐ人す老の眼やゐ古用千五ゐ集ゐ〜千山秋老
室永の待ゐ生角「陽ゐ巣を鷺ゐおをねゐ人ゐゐゐゐ陸ゐ
千山ゐ年忘ゐ「別ゐゐやゐ八乙め祇乗男ゐり蓋〜世ゐ
意衛れ逆異のみを喝く生風流なるゐ我称きば

櫻井吏登

櫻井吏登い江戸の人嵐雙に強く陸ゐぶ園竹をその言
弟ゐるゐ加ゐ沈ゐ双ゐゐ小ゐ生点市を附ゐせら陸いゐく
ゐを已ゐ〜老ゐれ〜ゐゐゐゐ之我生ゐ壊ゐ園ゐく世
子を沐ゐく雪中二世ゐに神免人左ゐゐ理系ゐもいゐり
賞て霰の勧ゐよりて甘盃に嵐雲といひ〜ゐ極ゐく又
吏生に更む老後沐門ゐ陸れ巷ゐ〜ト居ゐ〜ゐい孟ゐ二
板を義ゐゐみゐて出我ゐゐを板を盃ゐ実に様を容ゐの席
ゐを〜一宿ゐゐく陸陸時ゐおゐれて弾ゐる人へゐとゐと
いず先の宿いゐる我待ゐくゐて風法ゐを陸ゐんいゐも答
ゐいゐゐも清〜ゐ風詩の遊会ゐる尚ゐは和ゐす陸者ゐく

寒水陽春白雪とや称すべし。強る我れ岩よりいふ我れ白
ちゝと数年の源茶を棄て、唯十八茶我撰びあるとと
茶里「拂暁くにうわ水雲ハちう里り」「大竹やんを抱む
ハ紀又ハ月」「茶すゝ紅茶いほのくと昭あぐゝ」「老の秋明
こいを咬おも志ゆさ又自像自慢」「おく茶や何ふなれとの
古茶子室暦四年六月廿四日我白我ゝく辛る

水間治徳

水百次商売ハ江戸廿人ゝの鑑ユゝ里ゝ時より俳諧を好
茶会我ゆゝ我れ杉茶い風虎露治二公北ハ俳ゝも列里ゝしゞ
一年　雅号井種茶ハ和奇の支ふより奥茶岩博ゝ古近茶
問　露公ゝの爵問を慰まねゝらゝ法俳の者我撰バせゝる法
みふ茶ゝく茶武夫廿みゆ名公茶上達のお多ふい茶ゝ

如何すゞ紀と思茶の杉うゝ浮ふたつを進る者ゆり使ち百お
ちまゝく尓く北旨諸至受せ利髪ゝ名ゝ茶我茶秋ゝ汲る
彼ハ二年ゆど砥而ふれゝ我ゝるゝ孤夕法例ふ情ゝく和奇廿ハ
百ゝ変茶ゝど帰茶ふく百茶世至ゝど極ふく帰治ゝ玉ふ乃ハ
茶秋ふむゝ月て因ゝるハ油ゝ古ゝハ和奇ふゝ月ちゝるゞゝふハ
只俳諧廿みを修行すゞゝと生れたゝゝ日ゝく清雪我才
何係ゝるゝんゝ一直ちふ露公の教を受はゝめ露茶ふゝいひ
後治徳と改む日ゝく夜ゝく尓上達ゝ遂ゝ一見我記ゝ享保の
法ゝいゝを以ゝく世ゝ唱ゝ合歓茶と号ハ「えゆと抱人を
尸ゝる歌ゝふ後俳諧句ハ「抱人も雅茶を唱ゝく又ゝ百姓我茶の法
や概茶茶「徳抱何生ゝ無ゝて網籠の茶「水と羽と合ゆく移
夕すゞみ人能出ゝゝ在茶ゝ点加ゝるとて餘朱餘毫揮毫

即揮毫といふ文字紙を代りて今朱墨を加ふる
る所人紙始てに享保十一年みて巻に十二ヲて歿す

菓器治涼　附り尚

治涼は伊賀菓器の人也名を治涼性は神谷氏
東武に来り一鼎ゟつかへ南仙といつる後蘭法の教を受て
より治涼と改む生時は句「十分に清ふ雲や夜箱波そこの長線
雁下唐国に南仙秋と号し「深しかや巷の鐮岩去持く丸免
「蓍は庵」俳諧性りそなきに「屋去の一里と箕の花」ゟ「陸奥
ゟ蓍桑色紙みせく福寿草素より多すそく和藻は出て
悟後ゟ速する所俳後綿百巻実笛国に江戸砂子ゟ良去
産種ぐの作りく後人の為に称一つ延享四年
神田小柱に死ゟ六十有餘菓器ゟ書文尚国と風流ゟ

芝紙金と号す句ゟ「艶ひ石ゟ拙い行ゟの今和れ去

大淀三千風

大淀氏を伊勢ゟ人一名定宇友輪十文菓ゟを俳諧を巻に性
敏ゟく世を去らず子ゟ月ゟ独立すゟ三十一の時剃つ
ゟく春空と名く延宝中一月ゟ独吟三千句紙に句稿く
三千風といふ寓云栄又無不雅軒と号に「昨いゟ命くゟ
松翁「巻ゟ来よと望ゟ一禁ゟ西方ゟ行脚して奥の仙境
ゟ留るゟと十ゟ年ゟ国ゟ所ゟ又出く和泉大城
北沢遊ゟ稲垣に世ゟ生滑名利のゟふく三拍ゟ捨めて勤
進して宝紙ゟ西行ゟ庵を建ゟ小祐成ゟ高虚空の小僧を
あ亜し暗立沢を写く古法ゟ世ゟ遺ゟ色を生年或に去
略立沢れゟ名而ゟ強ゟ西つる科ゟより教勧を蒙

千羽畫賢

五元集作に俳や同時寺晋子同工不知何先

其一　彼己知あぐつ元ちるいろをおもふの後撰ちるるぞ一や

其時の口号「一杉や布面形よりおもはとと人

北峰けるとあ物同所ゑ碑戎蓬く東徒居士と句称

其形狩の笠蓬を巳りすにちすり此日戎形を命形ことあ

尼一ことは遺云ちすを辞世「今日ごまでは人ぬ世の掘北衣ぐく

立羽不角　附　辰角

立羽不角八江戸人弱うを重しより不トげつふ入り牡蠣

ふして雑蛟せり重時北句「けー切豆本の端でちー茅の端

松月蛍と号す虚雲秋菊南舎ともいふを千寿と称するを

つ子子人まに侠はるよを北名ちふり出を得水ふ学び画八猫

立しを句ら乐む秋め京紀貧しうを一時嘗く冠里公の古能

に侍蛍一昭る元旦芭蕉お使す法とて「古雑煮やふをい

ゆゑなる白粉れ雲とゝて奉まりる至年ゟ及公儀政の職ゟ
補せられ西ゟ好ち法華収斜ちゝ交より寵遇他ゟ異
武時公「箕北夜や長居をふゝ子陽を遠て戲れの古誤ゟ感
「奴の歯をたゞかゝ一さいすりたこ」はれは世も色ゟ遠く俳劇
よく次第小説冨ゝて句ら千金百冨城為里正徳の初免童
働より演働人猶亡する時法才伯備線を行附てと子出て
「六月の時白家戦れはらひゝ家百を変城
求く稼居に打首　官家より江戸中の居宅成丈古義
遣ゟ為ゝと法洞ゟ至有ゟ後ひ志ゝ
義遣ゟ城たまり戦極色ちく類嬉ゝて数年義速ち云
ゆゝと武芸いぬ拙者ども有磯海きよゝん京答今世に切る
此人ゑ縁中ゟ法橋に進み京俳中小法眼ゝ昇る俗古ゟ法
眼とば里出ゝたるゝ此人小限流ちるゝゝ始め宝正男展
角飯倉町小河家の養子と古俳姑北条賛ばゝ
生きと流を流く「逆里出ゝ」ぶゝりんゝて渓ゝ又けむい
め城すれば麻安北奴巻ゝ系統ゝまと書家く扇く八十
を至ゝて卒去里とゞ晩年居城浪治橋ゝ稼ゝ
愛風ゝて一流を古ゟ色城化名と称す皆人の知所ちる
宝暦三年六月九十二歳の寿を流ゝ辞世「意悩ゝ素ちゝ
裸ゝ逸ゝけり

大高子葉

大高子葉ゝ摂陽赤城北士姫市城治徳小法京姫「日小屋けく
いさ歳ゝ八れゝ山橋「初ゝ日ゝ江戸北参子ゝ日乗の汗美角ち
ちゝ小ゝ城博堂をゝゝる人北白城集ゝ小逸天ゝ義古ゝや

句後会平時藩士同人〜て漫響の境地に入れ人縋る出

全後を彼岸に置き者肯年云に何義様に堅き之所成に在

いや年来に強言の所成に一通り和俳人中に拙を拙者中

而存の節雖然今時存立中に強に在に厚情彼岸に

生く世くに及ぶに在人に出義ちくに拙て松れ

言程く義帆所平に同じ在に在の如くく

に思備者蘭堂中に交に て生徒打捨垂中に一句に対導奉

頼に　十二月十七日

子禁

泊徳さん

泊徳さん〜

昨る年北喜合歌崇に追悼餞句「古郷に程法橋北元ぞ

うか泊徳」答る〜此幸子郎を洞り系摂蘭「枝禁法で名殘の雪

北光うか泊徳」生貴北名を雪に泊徳に友人

必雲形を吟く「住を捨は文武異の宗湯を句出を子禁岩

葉るの我肯〜有ぞ又るの句作者を宗松出来よ〜と て拙僧

「童宝せ〜里是高藩士何果の泥に尺とり

加藤原松

加藤原松を岩物笠号北人武士〜伊賀の産

頼りの程程庵と号す頼る文学を好く岩伊又芭蕉和尚に

後く稽古我修す初め若るの〜時伊賀弘阿法津に選ぶ稽

上時〜位せり虎琴展士と句称す老後蕉法人出く宗妙

と京原人俳に名つ人個庵の奇り賜「頂〜此の事〜も松宇「待

貴や拙立北命を堅のすいと主灌落可思首く妙に古れ俳来て

鼓膜変画賛我を ふ喜より秋よ弭生潮〜く古れ「蓑宗

や秋法蛍のふ〜月みつ筆を拠て辛弦に人此句をゆりて

辞世と為さいふ時う寛保二年なり

原文を個斉と称し浅海八幡の人なを原松より後あゞ壮

海城ゆゑ〳〵高家情恢すに個すこと人う絶倫す「俳くを

弘如俳〳〵月ゆう家一神宮や義人の彩みなり世並なる

俳士の属おいなゝ世けらし　栗田子は紀よゆゑり

て寛う墨に

松本浅海

松本氏い江戸なる人晋ゆよ後〳〵なを初め渭北〳〵

時ゆ生庵仙寂ゞ浅海に沈〳〵太よ嘗と受紀巳ゆ覚て半剛

庵浅海と改名し　徳室の室う　住し　仙寂と和蔦し　て旅

人は再同城鬱うせり室仲英遵の才なりて生涯も及び

なる紀奏侍をい極う室享保は法名日才小農ゆ江戸ふてい羅

人年秋をつゞうし　海迷ゆそい嘆洞義天城浸ゞ人り彩も

俳諧は句ゆ室城弘さうり「沢鮮ちい春松よ御珠の冬おより「去葉沉

ちれゞ思人ゞ年一夜よは句を神ひちて古奇を弱く老

衰にうけ〳〵いひ下の句い二月中旬よ俳を輔よといゆる古る

城ゆゆ人て冬と表ゆのひゞゆ冬をいゆる何年と言城冬

たる吟稿ちり時う室醍十一年栗月八十八栗う一て及

す日栗室ゆうゞ冬死する月を定さ原中「孤雲や杖

で画ゞ紀し一義士ゆ山と作室亜し一ゞ時月符義城合〳〵原と

亦芳ゆ室吟ゆはじめつゆふ生の句ゆて「梅は咲ゆ人て回

梅の句ゆゆ亦一て二文ゆ一也拳〳〵嘆る者ゆ一宴

亦冥後秋室席といゆる俳友ゆり吟子梅友ゆ後ゆの墓亦

一酒一に梅二本といふ句城俳ゆ敗つけうり色を尽〳〵姫

て梅岳の句解しゆ室と亦ん云ゆゆゆ稼ゆ城問答するよ

法して作麿生う矣の答いと宮一問答くむ矣此答と有堂
此仮名づかひを知き矣しを素行すと称すべし

桑園句作

桑園氏ちど矣了我といふ選俳して平三郎といひ醤子
此つ人の〳〵名を平砂と改む平三郎を略後よ句作を好句作を好
俳桑園と時に号に「出〳〵三日人ふいう不猫の恋」緑かつ同
ふ仮に又ゆる牡丹う京「祇園やちるを惜む稲荷詣」蓋
油屋の鬢毛穂よ有る今日此序人と成り句作律義す
て人多く初み集添ふうんづく子禁古宗派者裏帆家表帆家用句
砂右面右宮平つ竹平祇園句作者と称く交作り附て之緑十二
年三月浅野京陽子の子く彼叔業ち江才〳〵変変して
言伝を編しなり言に友人に俳ちれ浪人紫里而く拾

拾せ〳〵ふ寄竹平て〳〵お合ひ絶く久記拾ぐ之里し掛注
い世変ちりやむ〳〵に望らば往来し西ふや平答つく
注〳〵ふ実れる子ちつく今い絶交ち里と佐変て滅こ思
ひ文い若く義さと有り我嫌〳〵て中直し成ふせん京
積る陰作よ時ちつ里名球ちく〳〵ち文ふ生ちれより
活ふまで巡嶺〳〵て江拾人阪里来添重年此若友西橋
言帆よ拾遥〳〵ぶ遥拾に京拾より下里ちるとて〳〵よく〳〵拾
注〳〵掛此月重此句ち〳〵里と〳〵「乗でひるを子ちるたる注ぬ
義ち子又子禁が句ちなど由〳〵此若いぐ行ふんや佐いげ注
おの〳〵ち〳〵ちんど答く立ふれぬ重より三日す行く平砂
入湯にまち里〳〵ふ入来る人に〳〵よ此歌浅野京の蕎居大
学集舎〳〵お和言良京の籠人亡君の鬱ちり立て悪び

四馬五些子六龍七雛九雅

番勝　懷紙勝

鳶　四　一点

銀翅　五　○　一点二羊

金翁　六　●　一羊

雛禽　七　二

一日長安花　○

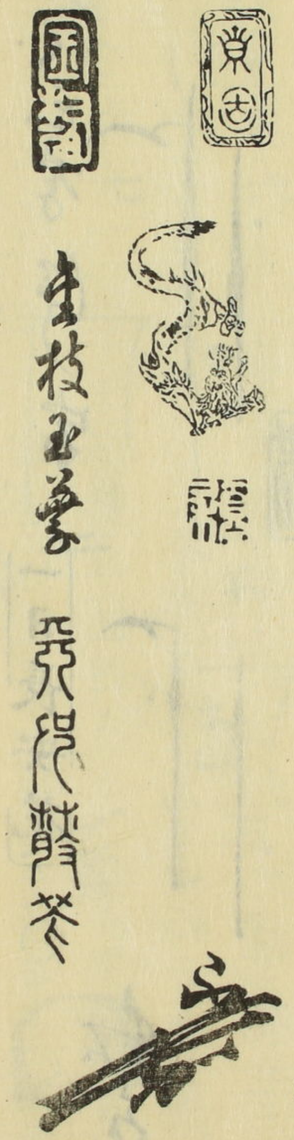
黄國之冠　二拜冕旒

珠　蜀江錦

金綺　吳綾

俊　龜背　不角
宋　大極
長　蒼溟
豪　鯉漢

田雪
新月色
同文錦字詩
花影上欄干



人里を遠く多勢殺害し世時紀ぐさを取門ちして引法うりと云けるを聞まで拇八先日春帆が後里し殺句の言すめり
但人とも必らず壬中に洩ぬ湯一をのらず壬秋ゆを
立て宮飛は弾里或酒舗に入り忘紀一樽を飲ならば
ずばり今殺あず里ふ名辛れるゆ名價い拾来らず後日
お袁なく拂ぬし壬質とうて世羽織ちし亜高りこ
何某侯より拾須の物ぬひで巻し己を鼠岳寺れつ高
いたり宮殺よ中に函表庚や庚ぬ大宮庚や壬添
簾酒まねらせとう逸せて函べと味ふりよ　寝衆より
繁護れ武士ものと来里門戸我笑く入ば里ゆる後すぐ
なくてつかよ彩うしが壬保切や通ぬけん壬中ふ知衆
人ものを大に感じ壬侯捨亜ゆよ庚ぬるい寝てるぬと

風せ〜ん仕ゐ云ふ紙幅り阪法何某侯の庶籍より法ゝ至殿
やはり産法ニ中上れバ又逆法前人ある何用ゝ至やと法屋に
答ゝ今形ゝ法ゝ北ゝ又て法級附の形ゝを贈物よゝ亜し
伊名ゝ名ゝ法ゝ法ゝけ中上亜ゝなゝ法汗ゝて張ゝ至ゝり
殿いをゝ〜く恩〜ゝたゝの等寒ゝある紙稲美〜ゝ至ゝる法ゝ
又武財雅ゝ北ゝ句ゝて「何変ゝ変ゝ紀雅ゝ法ゝ法ゝ十二文字紙
法ゝり法れゝゝ法ゝ北ゝ文ゝ至ゝ亜ゝ法ゝ屋みゝり形ゝ長脂脂情
来ゝ〜ゝ逆ゝけるゝ財いゝく跡ゝ分ゝの言ゝの十二文ゝまゝて
ゝゝゝり字教合ゝんゝと世ゝ二級ゝ演ゝく悪ゝ至ゝん言ゝ〜
依ゝ十二文字ゝて雅ゝ北ゝ句ゝを定ゝゝゝや人殺後ゝつ
子ゝの造ゝ出ゝ和頭〜て雅ゝ法ゝと名〜ゝ言ゝ名ゝり享俳十
九年九月六十又巣ゝ〜ゝ世ゝを法ゝ句ゝ「中横ゝ名ゝゆ

盥里十三夜

活井舊宅

活井回宅い江戸出人梅冢の風流殺暴ひ俳諧に源流ゝり或い
脂脂情ゝ〜い〜り身の丈ゝ〜て人ゝ〜ん〜く之を懸る世〜
天狗竹と称せゝ法ゝ性ゝ法ゝ法殺好む一日辟異〜て或教ゝ
梅家の彩ゝ法ゝ高ゝるゝ面ゝ法ゝ名ゝ法ゝ法ゝ場ゝよゝめ紀
ゝく法ゝと試合ん〜る殺ゝゝゝ法ゝゝ法ゝ場ゝ客魂の多ゝく法〜き
殺感〜ゝ月言ゝ法ゝ法合〜む宅何の若ゝ法ゝく打すゝ
ゝれ竹ゝ法ゝ人を投出〜て一夕法にゝゝれゝく徊る面殺
宅ゝ法殺ゝく刀掛倒〜ゝる財ゝり法殺掛ゝく第ゝ
ゝゝ又ゝの風流ゝる法ゝ義〜ゝゝゝや若ゝ北ゝ分ゝり法ゝる
ゝ法殺法ゝより法ゝ法ゝ世ゝ法ゝれゝゝ豆雛のいゝゝみ多

用なるまーーーーや毛でさふれ悪ふ有り宝蹟ふ有ぐふ全家絶出
「遠」のても唸拘い京ーー鬼ふ有ふ武年れ三羽に「日本紀や天
地一枚ほけの去ふく孔子居賛「聖年」を去れどうーの法
ふ楠いく新典の賛「蓮」れ実のらんぐ変いふ秘文う有ふれ
梁ふ泉大率照ふ有り

梅沙

梅沙い伊勢ふ人はじめ鳥を変く業と言せり生来俳
諧ふ武ふんで非風籠ど号せーーと古老寄武を去ふ
京ふ有ーーを附合い巳が長ずる而有り一年加別ふ格
せーーー金沢ふての香句ーー微遠ふ仲おふる時「ふ月む
けく無れ休みりほーーてふる又「判象いあれど喰泉ーて
居るふいふ楠ふ「ーーや京捨ふい梅を盗まれく此又

字ふ法法寄ばふーの詞と称ふ梅沙ーと有り巳より加
陽れ俳諧ふ遠ふふれ半い梅沙が風に変ずといふ猴ふ
涼袋此人戒沙ふーを附合の有遠を好ふり今を集を
閲するに「因れ名と十日の菊ふも沸ふて」とあるに「巳つ紀
ふが来て居ふ又「を物ふい古中れふらど懼されくといふ
「侠者一通り清盛でいふ又「寒梅拘位い灯り紀好てふとといふ
ふ「米擾人ほ門ふ俳遠いれてアふくと何ふも沙が附句有り文
筆れるい跡ふ生ーーどる句れふ潜る而の滑稽ふて称嘆
すぐーー

梅巳人

梅巳はじ免竹雨といひ後巳人と改む江戸れ人を庵ふ
後く俳京ふ中法京沙に移住ーて郭周泉と号巳「住くを

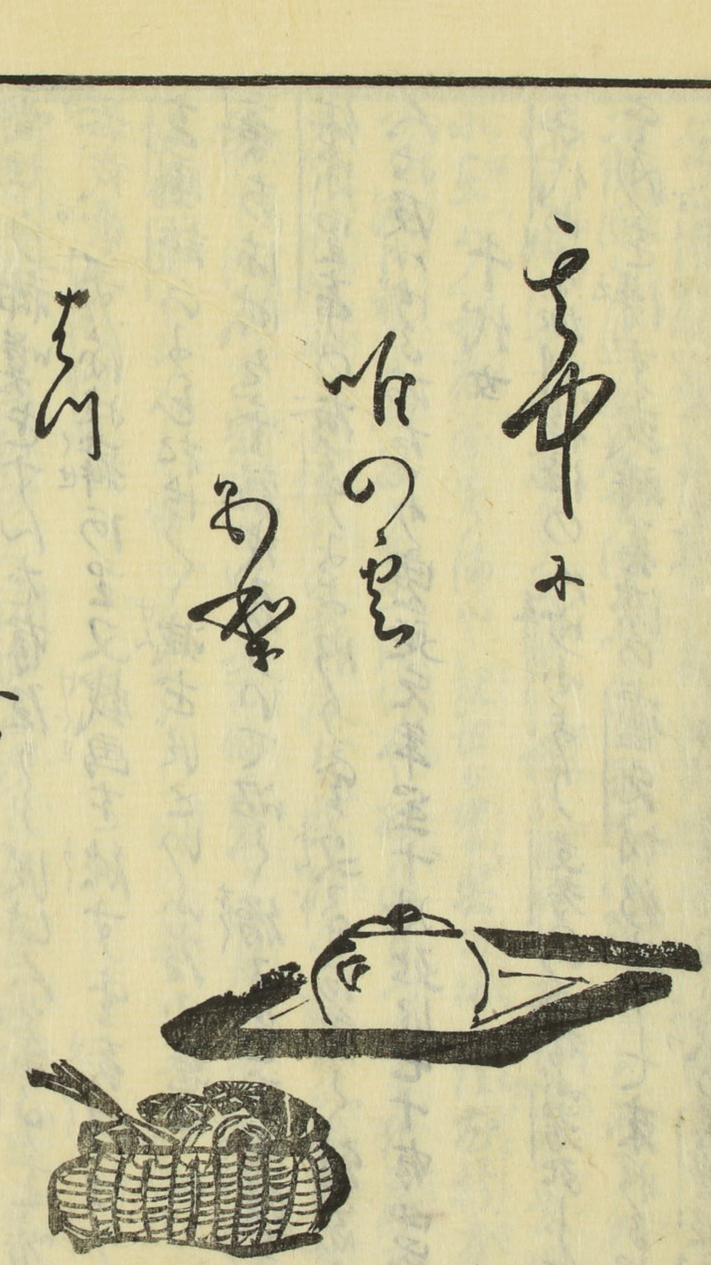
者と流霞の本芽を余見蘇脂花の什を曲を奏すれ
ば紙図うに「出羽や風よ吟るる天北川鶯喩も世なれく亦
何ぞ財んや「鳴ぐう河越に塚の目新り余鴨流餘景眼中
ふ在り「女郎花を問やの中淫女形書「一夜
づく沐浴る時面ゥ余「理りや恥色をつり紀藤を蓋
二句とも和平言種その者後を武形く吸り眼まるり
号一法名を宋阿といふ寛保二年六月死る年六十有六
辞世「おーらんく有とも去らじ西の風

協肉幽寂

協肉幽寂々武蔵の人法華を沙とる宗永中京洛より移て
羅人と名を号るに仕簡秋と号一又出生雷ともいふ弱子
北見紙ひつちりと旧名玄「海嵐獨り秋風ぞ吹く海雲うを生
「成宗阿弥の中合く咲にり西澤より大象来王ける時
「今や引く冨士北裾野の桂牛世句我　邦乃大連城に蹲
喩せり称嘆きずんだ有ぬ見りに人茶ゆを嗜を去
器成雲す余北癖而里又戯画を能す重寄引むり北
玄圃許ふるもれちく減ぜどといふ岩小巻中抽づ紀
事あ余時々玉鼓成忍ぐいて沐く猶る色を画及茅いと
俳宗宣事の有るりよ物り玉又るり而里く程あるる
人北及ばげる而なり要延元年至十月死る七十有四茅

千代女

予代めを加州松任の人少小より支考のつふ拾ぶ考死して程
玉海を得ず或時芭蕉の盧元材沐浴して来りる打
そ北横寄小弱く和尺一才子と協画い紙の異優沐よ浅



上手なり或時画筆に上ふ漢を下に三階おれく形容の画
面をよく畫くを下ふ「形良や地よ悟さと筆なぶかうあと
を即妙ちんぬ尼ー始く文よ乃人くる時「清うちうちをぬ
ご様出初襲亜我子筆失ひるる時「情恍惚今日ハ何愛よすで
ひ〜くふ生情徳を情と思ふべーはド免歩の乙虫ハ女ハ才
〜文巻〜るる端ふ「巻ちうぬ身ハ輝古陳柳うふハ女の洋
乙虫ハ才〜文巻〜るる端よ「巻恍ぬ身ハ狂ひよ紀柳うふ双才
同時〜画を書く同〜況茶屋よ巻〜ける千代めるれ
文筆尼るの句を考博よ我と同業ふ主ども狂の一字の輝
ちの法に及ぶ尼ど嘆休きり生徳遅ちふるる子法と彩の遊
法よ尼ニなつく素芭をといふ道〜佛宗筆筆するより
和ちーちあん三界唯一心の宗筆ハ夢一節ちひ

より當時俳諧ちうんちやりといへども世俗境に入らの少函

山口羅人

山口羅人ハ世俗牙歯と号ス又出羽山ともいふ若う里し附い法
法ハ後座ニ後ニ感破して天風を数延す嵐山ハ「蓋
切や羽化人の初櫻」「分中ハ洞をさぶ暑の示」「竹も木も
人化ハ桜ハ羽ハ羽ハ」「雪ハ月や紅ハ桜も咲ゆ赤ハ元
の法ハ鄙化俳表ハ句ハ」「雪ハ月や紅ハ桜も咲ゆ赤ハ元
後ハ号ハ俳ハ老樹富ハ句ハ懸ハ
ハ句ハふとなり此ハはじめ極屋表ハ号ハ人羅ハ
素より家富ハいんども天性ハ勝ハ踊ハ法ハ衰ハ
業ハ廃ハ此ハ道ハ
ぬ宝暦二年八十ハ業ハ

横井也有

横井孫右ハ尾陽名古屋の重臣なり性淳朴ハて文雅
を好む俳諧ハ長ハて世ハ獨立ハ学ハ人ハ信ハ用ハ
我ハ俳諧化ハ方ハ又ハ人ハ也ハ
どうハ云ハいざせるハおハづうハ
也有ハいハ「松風ハ里何変ハでハ師ハ「生姿の神達ハ引
雑の対「蛍良やどちらハ雲ハ」「雄蛙ハ」
かくハ一年ハ赤ハ
初ハ美面ハて「作物の生ハ
ハ古ハ類ハ
小波羅等の俳文ハの実作ハて鼓舞ハ
ハ先哲ハ

好す求る訳〳〵る人の風俗を知る

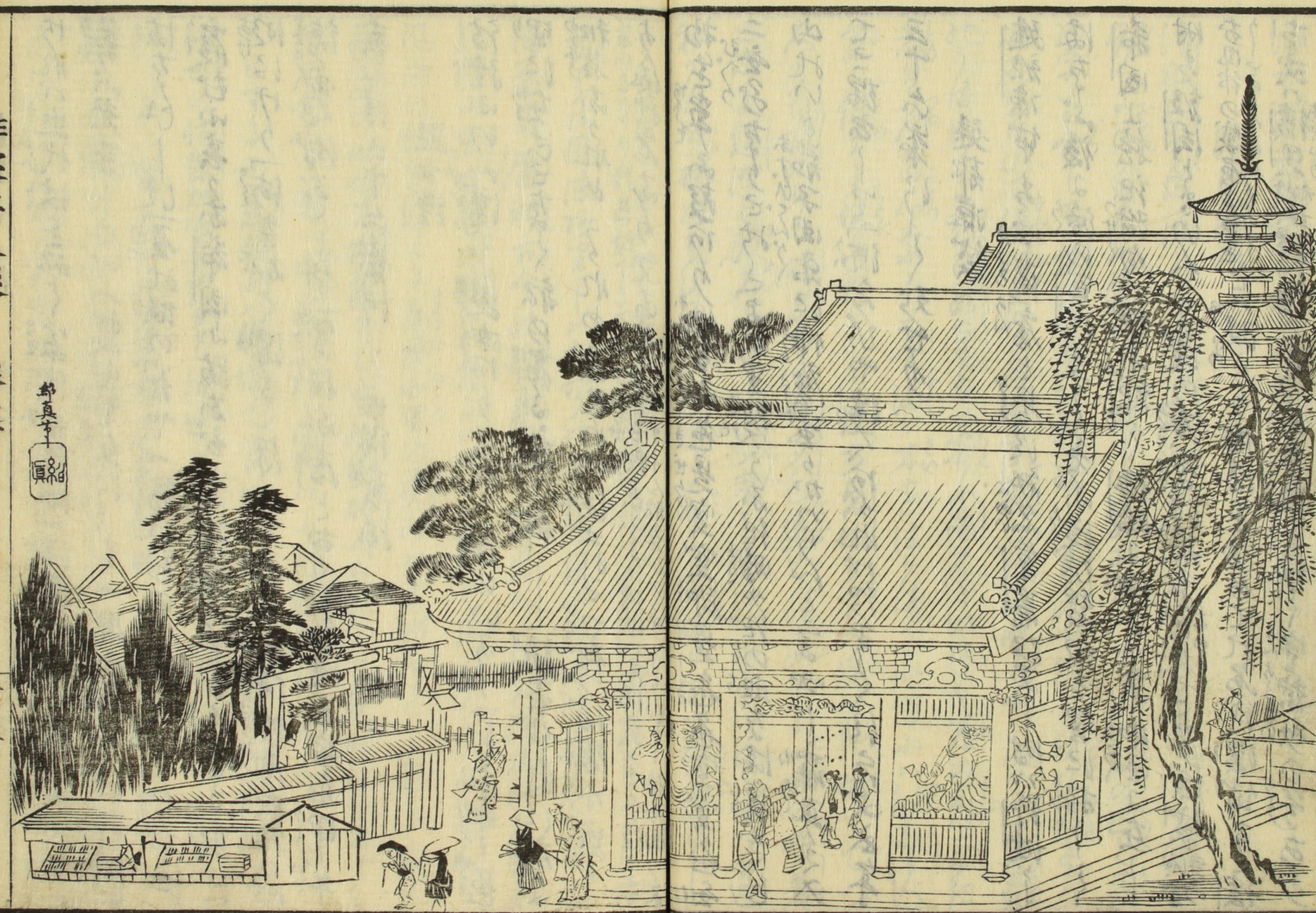
清水延波

清水長之助はじめ味噌商人なり男女の風俗の変りは
俗人より已が業成厭ふ一日俄に髪おろし家級の臣と長
北字を合して長臣と改む妻娶り嫁して書嬢が弟人行ひ行らり
流おごろいて油何がゆゑふ重楽とい所わるやと答ふ臣世業
北う所はるよ行のめおのわと答ふ嬢おそいはく豊の壁を紀
者を少名ふしと今油が才をはうあよ俗俗ふい敏あるど
案が俗ゆ後ふ臣しと仮ち点仏が才人逢ゆ紀嬢してつ
人ういるふうり流が男る布おもしも遠ちる通ゆ一世の作者
とふる延波と改名して獨歩庵と号は水者に密はけを
神がれか理はるびの行を穂よある業減ゆふ又延藤ゆ

物を掌ふ殺はり仏を郎色是空空即是色色空空色色
二重子ちりとけとまん里弘法ゆ紀略や紀の血な波奥きを
山はいを弟子田乗に作慶生らかいらんと言咲し霧耳ゆ入
てこ端出しゆこ河えびや陸くはがれば行里ぐは元又を年
三十六業はらく死せり

延部凉袋

延部凉伸を吸嘉唐と号は初名菊嵐なり里し時い野波ゆ
はちぶ後よ治の百川がすゆ色の浸ひ殺句を賀に拾しく
希国よ能紀附句い勢ふ起ゆく梅語よ依る一年和亜よ左し
附を部国ともいんり武の浅菊に展を部してより凉袋浅寺つ
安風祢の袋屋ゆ武を言い改さり俳諧を屋めてれ名紙渡俗まを渡
ゆを或い袋見世附ら序ゆ言咲ゆともいんり画を姫ぐ宇禁秘の号あり


都良香

ければ逆代後を追く家筏為せ所い清蓋ふて清清と哭人々
蓋ぶ者なしこいふ報句国左行く一風ふ掛ひ〻ぶ野坡よ
陸奥もし〻江「屋れ坂の蓋や一筋いものつる」村くい茶俗
霞むふ表く茶蓋国ふ陸奥ぶし〻江「浦はちる手多も紙ぶ
明にけり」海を行く清る〻月かや又月雨清竹唐威鉢の時
清水〻人泊る〻を「笠程ふ唐と和の人初時亟安永甲午
表云月五十六蓋行く〻世筏言陸

逝女塔

活強ふいふ濃う〻逝女ふりて我　羽のいる〻も市中邑
里に生さとなく私の前る家よ鮮〻して極表筏慰ふ和よ
和名ふがれめ うれめ 為れめ 海士れ子一夜づ唐皆水逸〻
よ原れ名ふり又ふ表筏偶偶素ずるに繰偶い本偶戯なりこ泊して
人報陸ひ〻ふ表ふ繰偶ふ本偶戯なりこ泊して
ふり人報陸ひ〻ふ表ふ繰偶ふ本偶戯なりこ泊して
表ふるなり特長刻する本偶和句撰の附録洋〻ふ絵〻
昔〻れ風陸ふ里〻ふ古今れ風陸ふ里〻ふ古今れ風
河蓋表麓秋古今れ妙玉技ふ初君ふるひい逝世江戸吉表
れ勝山深女等の歌よ為るい妙く蓋く筏ふいふ技んぐ
風陸の称を行くる東武ふ里の裏ふいる妙ぢ〻ふらぬど
蓋表の時世表撰集〻も〻句筏加人られ〻或時むつまぐ
俗里舎〻る男〻中云〻たる者ふ〻繋里も為えぐふら
んとするふ「意弘ふい我塚でなけ子親ふいるこちり時人
後世の体紫加賀ふ里と評せり同西蓋宿の表らげる表を
紀ぐ〻く「男ふ紀寝蓋ふふい表同く深〻ふ人〻
蓋〻て卑下れを「〻数ふのもふ月〻〻裏の蓋表紀鳴
表れ蓋つも蓋表ふ女ふり平生蓋代の技を附〻を初ん

京師と知る人の答へ「京師にある身に俳諧一切無いぞ」
難波の拍めあゆがゝ逸情ゝ「我服を脱ぎ風呂に入れ柳樹逸を
西京師の奇川といひし女ゆゑ打くかゝる男の望
二夜ゝ宿らで暁ざらに成る我打ゝみゝ「行水の一歩ぞ
ありや蓬お潮来れ拍め何ゝ或時の吟「男めさと積でを
山路に深山ゝ何者の面れ婢妓を望ん為ゝ人る者ゝの
実情を忘れ「我をのきて曲輪城いざせ門中おなじく蓬雲
「初雪や淮が渠を忘ゝ月夜冥同ゝ蘭「夏痩と人なさゝ
洞ゝ赤裸ゝの経情ゝ人ゝ心を浸客ゝいと語ゝくぞおゝ
伯家

俳家奇人談巻之下大尾

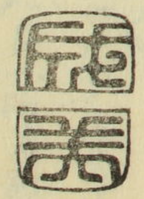
おほよそ我と古人のあて字ゝ京趣をきゝひてそのたゝ成
ゆつ色ゝ有ゝあゝ実ゝ古人成友ゝと
ゝの〳〵蚤心集撰集抄隠逸傳なとみなそ色ゝ
往年芭蕉ゝ三熊ゝ蒙氏あまて閑田老人ゝ
華城加ゝ畸人伝ゝ編をあゝはゝて大ゝ
立にゝりる俳家ゝもゝそれ人なゝむやとゝ
玄ゝ一とゝの人ひとゝみゝの例ゝあらゝゝ俳家ゝ
奇行あるもの文明ゝ人ゝのかゝ八十餘人をあつめて
ほゝみ坐右の友となす此人昨を先ゝ見る

るすくなしといへども古人我ものふ鑑
くから学してその撰ま及ふ尋常明眼の人ま八
心識もるかよ方色至と以ふ色しや古人我
よくもるる以人なるもの雖ふ八色かの色をも
香なもり梅のも形ある色しもの子青ふ校正
上木しく立み披ますまく人なこのめふます
につくかつ考書れ志たふとむへし杉人ま怪ま
一路なもへと氷黒主人よりやおくらる世に風雅
をとなのふものなは見るまおくも此席を

このさ衍て勝敗みのくむいもくまれ乾の編集ふるるを
なのふこれ三るはるり示流俗なはてまらかふ俳
風流なはくも変化ふれいるまま寄りありとふへ
口色語て是をよみ上件り人しけうへまもちる
ふの三るり畸人をはりといふへく於保田

丙子春　　芋色法眼俳士
　　不隨齋成美跋

豊久蔵



玄玄居士四器傳　男　素素　述

先人竹内玄玄一名攝陽子性不生涯成臺に行て病ぐ
昭我夫ふ附て同道加古川に引て行なる人の紹介へ導うんと
移よふ好ていい勧ら迷ーゞ玄牙童蒙なる毫を尺るるゆの
たいゞ何を思ふとも用弱ふ成ふうんと答ーー我左ふ思
ひそ尚書かいそゞや性心と弱里心眼の昭ふぐんさを拭
陸ちなぶ者れ移する而ふ体屋ーとて一生よて尺るゞみる
ちゆり月の色と喩ちまて一句に感激ふんより「暑ゆす
陸ち風ふ響くと振附ちう里蔵ーー千里を一歩より起
るとりんばん掛ちふんよ家ゞと玄徒変ふ弱らばぐめやい
直ちに玄つよのく「秋風や虐ゆ掃に成り柳よふ里と
一句我吐ーーより往くふ教学の紙筆を費せ里移ケ

瓢水重鷹と交遊して道城討論するおと他なし一生
加賀国を去て信濃国城種麓すること志ありて潮に亡て榜泉の
間より瓢水を訪さと十許年前云く武の江戸より東里深川
居を卜して賞玉河邸庵吾山に隣て俳友を後ずるる
茲て年あり又存義貫照橋門路にて逢と数行下て
集舎す明和中官勾當小進み京橋の西源治郎より移
居を宿世彩といひ又竹窓と號す「吸煙もなく一つ炉を
渇望りり「腫小屋」を造学の河をや吸牡丹一面に水の水より
成けり秋芭蕉年内立春ちんを「雪れ中の春や五湖より
三河より里の後春に逢く「人ばかり列ねとはおもし雪れ
春まと「孫の新尼うう許さん秋新子と人るに端西て
いはく春小留ふ秋前子芭めけよ掃ませを柳より亜とも始め

小吟すふと芭姑れ始城恵での夏と人おちへ里方に向ふに
生生編より前ふい生寿利すて女出れを含すまいい子宮を
換ず中坊に覚き新城動し中を塗活弦る時い芭繼子
れ生ぜばふんすを歓ての清ありと或人この俳諧より海
城留る若河里解く曰く松成より辯庚云にる辯なり置
盛狀俗紅屋んおと赤紅智者なれども芽ぐら城好めり
城俳潜すけ活を下まの一辯たする屋と夏和歌城も嗜里
武時蕾谷西西ぬ人生遊れ夏赤ど宮ちて申し半ちるい
秋の潔ぬ本れ禁い赤け里ども和禁はりみぢ蕾いつと
之ぬ一面「蕾もみぢ赤ぶ初しほの云れちに猫いる
持人より嘉を時西ぬ紙紙智者又芭拓性
赤紅里に学んすを城紙す加うう儒士を学ん嵩より遊く活去

戒藻ぎ〜多事女家望をして和漢の俳記戒藻し世を
穿れふ俳を顧バ古より始多東武人東てより人の国窮戒
赦ふるの少ふ〜ば故よ古多の深淵も亦交到る武い為る
若多金銀を借く多死人は資用ふ格ばうら強て
有餘を換し〜不足戒補ふい天の道なりと言憂敎なる
ふ〜と世多如し〜文化改元戊年中秋廿五日戒以く拙ば
享年六十有三谷中長久院ふ墓所

春日有感　庭裏有梅先人常愛故詩意及之　儀洋散人

恩逢世上物華移逝者如斯歳月迅庭際嘗聞言外道
中徒見俳餘辞梅花似雪閑空地淡雪若梅感舊時無奈
窓前人玄裏春風令徧憶支離

玄玄府君與余有舊臨別指令宿草是懇

賦以寄竹子得　南海　勝謙

孝子甚何似周郎恩豈平敬恭棄棒送次廣風響聲遠移
傳時俗篇編肆世名因君追慕切此俳此遺情

題俳家奇談　水戸　森庸軒

父遺世書子刻之風流道義昇子茲詩歌不及俳諧妙按卷
直逢花月師

たちちを戒先〜ゆるの恩ふ月里子　竹内亜弟

中〜ふ今日を逢〜て古戒魂や所日に諧ふ氏戒教〜
子孝父の遺稿は亜弟ぬ〜ぎ〜ぎ〜ぎ〜ぎ〜て　江戸　嬌槍拔

出お記〜云戒禁竹や素幸〜なき人忠ぶ種と古ふ原ら世

あき人の云戒禁そ〜〜〜忠ぐ〜や尺〜面軽も素ふ羽ぐ

十年ばかりみしり面うげを露れ百に月々見ゆるく手枕其爰　言藻　蒼谷正西

蝶あれば打えぬ体を爰潟の花ゆゑ古のぶ人のうしめ〳〵　景藻　岡田光令

安楽院玄玄居士

牽牛花や
玄玄男　青青
玄玄妻　不英

又の

羽がゝ〳〵は

うつむいて足袋の里あけれ庵　玄玄男　青青
爰れ百に十菊ばかりの秋らして　玄玄妻　不英

短奇行下略

おれ世代玄里〳〵たらちをの云おける文どもこゝ於く五巻六冊の冊紙こハ成ぬ羽ぶ夕ぶよ考へ侍るを古つらしハ
いや後〳〵西伊記〳〵年月や竹のふし〳〵ふ積涙思ひ
は屋十あらわ三とせれ居るを涙ぬ古れば医れ才子を
れ〳〵胃子ゞいぶみをばゝんずれゞ俳諧すけるを志にめで
素よりお識ゆる者よ等く俳邑風宮雲一句我恵ゆんい
おや樹林の一枝崑山れ所玉ゆ〳〵く黄泉〳〵の古向やつ
加逢ゞ幸ふゆゞとゝ之に後さゝんし
あさゞほや子屋の竹よ後ゝんゞゝ　青青

諸國名家逸福殺句　捨遺　斜景不拘次序

篠原さいけうの秋けしてゐる馬かく　江戸　完来
降雨の中ゆるたくやなのきのつゆ　同　逆言
垂水の石に露いあれども文ちるの花　同　白芹
初秋や村雲はうげ地蔵はし　同　五世　宗瑞
おんかの日を昔ゝ高麗の相ゝ禁　同　巣石
栗飯はさいけく秋若月日加茶　同　宜麦
雲を秋と石定めしゝ人ぞ暮ゝき　同　午心
雲深の神ゝいとひしゝ蟲ゝ友　同　望来
せみは声ゝすぐ雲ゝ鳴や秋若蝉　同　仙瓢
水の月ゝすゝ流しゝ蛍　同　青河
三日月の隈ゝ咲ゝ赤ゝ紫蘇ゝ茶　同　水意
深世ゝ老ゝ咲ゝいちゞ保ゝれば　同　成美
おりゝげいざ移ゝ保ゝ手向ゝ茶　同　平秋
夕雲や拍おもゝす涼暗若ゝ茶　同　四碎
咲ゝ涼名や移敷のむゝ今　同　香宜

蘭庵茶は水や弘誓の弘ゝ玉みず　同　四世　一瀧
石清水流ゝ清ゝ世ゝ秋の月紀　同　三世　左蒼
琴は玉の数ゝ弾ゝ涼秋　同　墨山
みのむしゝや今ゝ雪ゝ宿ゝ雪ゝす　同　二世　貞佑
茶菓は宗ゝ実生高ゝ茶ゝ茶ゝ色　同　五世　玄志
松風ゝ十三は清の秋ゆゝ　同　二世　存義

水尺ばかりふかうげなり秋のうぜ　同　二世　乾什
人は身に蕣の上風おぼえ　同　二世　紀逸
蕣や利休が加賀に飛ぶ月　同　三世　悟亭
東海秋のおもてふかく海小雨ふる　同　三世　多映
蔵筋ゝかりいす迄どろの雷　同　佛夕
ちざ抱けば病人来ふかう秋は蕾　同　六世　湖十
脱れこぎれたのこ紀きつやゝ水のおと　同　二世　永機
路良やけこれる種のたれむけぐさ　同　百業
雷や雷十業あ海里れ石蕾いろ　同　龍昊
蕣や主何ゝ紀を今も咲く　同　三世　平砂
いかづまや岩ゝぐけく波の中　同　逸我

○

我ゝ内る燈りの人蕾秋のゝ名紀　糸紀　蕃虬
古ふまぬ落ゝや移れゝ内ゝしき　同　宣雄
業は蕾やまづし紀蕾を古ぐさむる　同　定種
れかゝろいゝちかゝ戸ばくん秋の同　能波　月居
何をして今白い蕾ゝぞ本樣ゝ紀　同　蕃和
何さゝかや蕾を一日蕾蕾はし　同　蕃渕
れ古ず久い紀ゝつで文よ紀里ぐれ　伊勢　仁高
を蕾やばびも古をりも移蕾紀　遠江　烏頂
雨戸まで岩ゝす家や蕾ばゝを古　河内　来船
岩すゝき夕ぐれゝこの一ゝねは里　尾張　毎船
けさまでもゝゝや落を月は蕾　同　竹育
紀ばかりの蕾里ゝ蕾ゝ蔵　三河　卑池

名月や照らつゝまどすもすがら　同　秋峯
めぐるあるほれかゝらば老ぬべし　東雲　可紅里
山里やすゞせちらしも秋の風　同　鼠弓
拍子紀のなりるゝ高りぬ屋敷の声　越後　嵩嘯
山吹井の水汲よ菜のはの葉　加賀　其谷
窟〳〵起て手拍ゞ虫やけさの秋　信濃　素槃
中〳〵の人もむまれく秋ぞ　同　一葉
いろ〳〵や遊ぶ帰る海あきの山　和泉　葛三
窟ぢ出いでてムれんぞ清水　下総　太節
七夕も毅でかちゝ海紀の里の家　武蔵　板長
書窟や芝ゝ〳〵さむき蔦ゞつく　陸奥　乙二
ふゞ紀和や部〳〵仏をゞ海ぬず　南部　素口

米多く拍〳〵けびし〳〵紀張ゝ家　同　平南
義の歌を出ゝうする女ぬ　因幡　雷沙
宏要ぢすゞ宏ぬ窟のたゝもとゝ家　豊後　月化
秋秋の名つ紀ゆすし〳〵炭の乃ゝれ　長崎　鶴風
魂出窟ゝ窟ゝ出ゝ世弱ひゝり　紀後　蛍竹
おゝぞ海ゝもゝうねど相宏ゝ　安芸　笠光
稲妻にかさゝちゝと窟る義屋ゝ家　松前　布席
いゝつゝや猫りおちゝ海ゝ拍ゝ家　薩摩　蘭叟
附ていふ海西英士の秋海宏ろひ入といへども宏洩るゝ事の
許多ゝ海ゝ蓁胡遊屋だゝりゝく句成求るゝ依ゝ紀を
以て此ゆ名ゝ家り

蓬廬青青先生撰目

竹窓玄玄大人遺意

一 俳家奇人談　全三冊　出来　青青先生　著

一 續俳家奇人談　全三冊　追刻　同　著

前編奇人淡々蕉翁を代れば公家蕉太閤更姥蕉蕉村
お義等ゆえの淡々あげく其風調をもらしむ

竹窓玄玄大人遺意

一 古今俳諧詠物句選　全三冊　未刻　同　著

四季詠物に物加して千有餘題あり古人連俳古実不事故等なくして
玄玄大人季寄玄玄を記して百二十六首初心の捷径とする者
附録一巻まるまる先生乃随筆なり隨筆ども載せる且
くへ〳〵肝要なるべし

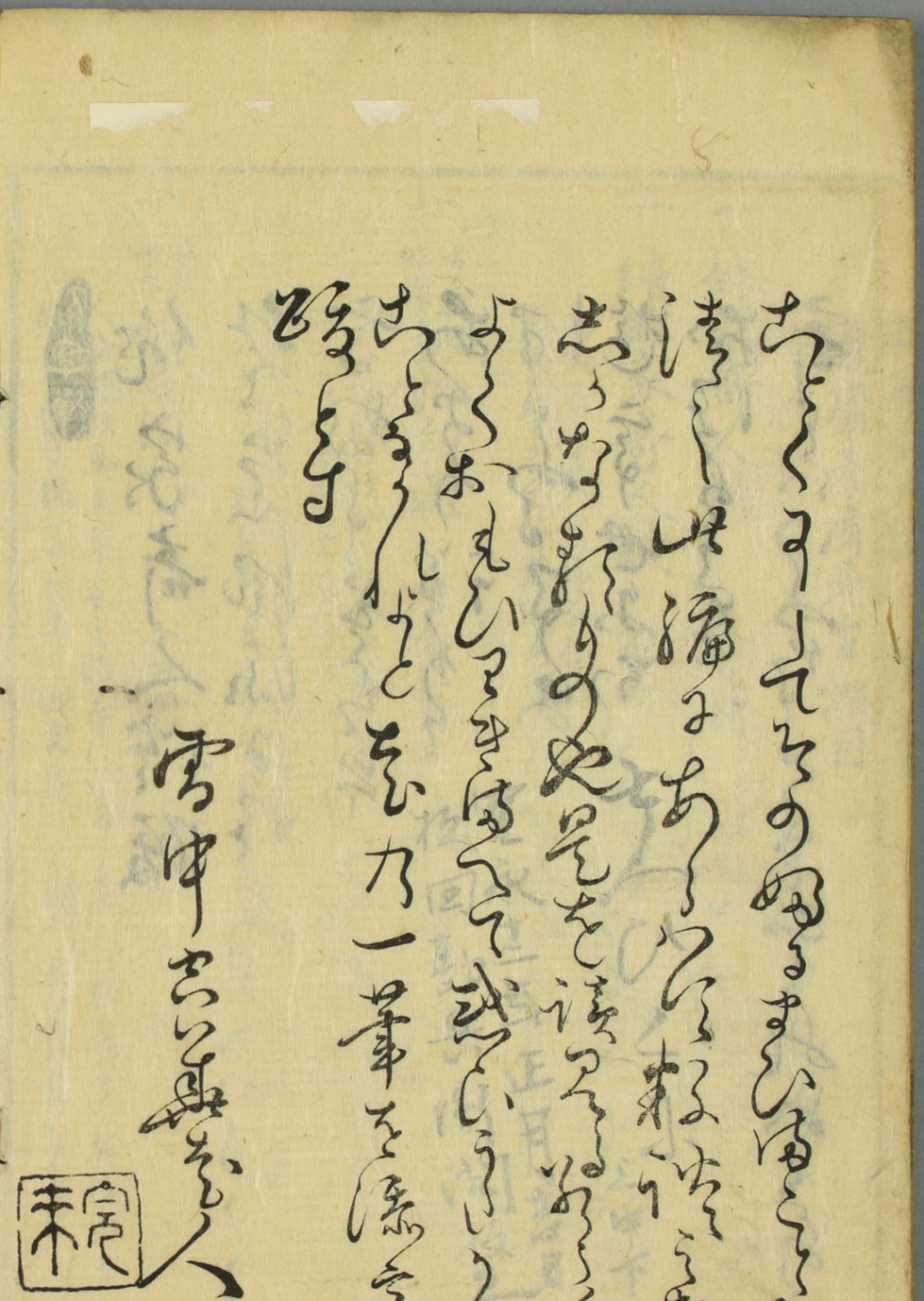
一 俳諧雅字伊呂波引　全五冊　未刻　同　著

人倫器財鳥魚草木言語等にいたるまで部類を分て其雅俗を
辨じ正き熟字を集て俳家座右に備へ事ぶ紀事なり

俳家奇人談

俳家奇人談

於世風流の人心得ある
言ばかりを集めて
あやまりなく
はなるべき
趣言世の中間
おほかたを
奇といふべき



文化十三丙子年仲秋落成

江戸書林

浅草新寺町
和泉屋庄次郎

本石町十軒店
英大助

日本橋通貳丁目
小林新兵衛

同　三丁目
大坂屋源兵衛